

K (低い声で)

「勉強か」

私 「ちょっと調べものがあるのだ」

K (低い調子で)

「いっしょに散歩しないか」

私 「少し待っていればしてもいい」

(Kの胸に一物があって談判しに来られたように思って、立ち上がる)

K (落ち着きはらって)

「もうすんだのか」

私 「どうでもいいのだ」

K (上野公園で、ただ漠然と)

「どう思う」

私 「どう思うって」

K 「恋の淵に陥っている僕を、君はどんな眼で眺めているのか」

私 「この際、なんで私の批評が必要なのか」

K (しょんぼりした口調で)

「自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしい。迷っているから自分で自分が分からなくなってしまうので、公平な批評を求めるよりほかしかたがない」

私 (すかさず)

「迷うとはどういう意味か」

K 「進んでいいのか、退(ひ)いていいのか、それに迷うのだ」

私 (すぐに一歩先に出て)

「退(ひ)こうと思えば退けるのか」

K (不意に行き詰まり、苦しそうな表情で)

「苦しい」

私 (Kを一打で倒そうと、虚につけ込んで、厳粛な改まった態度で)

「精神的に向上心のない者はばかだ」

(少し間をおいてもう一度)

「精神的に向上心のない者は、ばかだ」

K (力の乏しい声で)

「ばかだ。僕はばかだ」

私 (Kの口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受ける)

K (しばらくして)

「おい」

私 (Kの顔を見上げる)

K (悲痛な感じで)

「もうその話はやめよう」

(頼むように)

「やめてくれ」

私 (狼がすきをみて羊ののど笛に食らいつくように)

「やめてくれって、ぼくが言い出したことじゃない、もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。しかし君がやめたければ、やめてもいいが、ただ口の先でやめたってしかたがあるまい。君の心でそれをやめるだけの覚悟がなければ。いったい君は君の平生の主張をどうするつもりなのか」

K (萎縮して小さくなる。突然、独り言のように、夢の中の言葉のように)

「覚悟？覚悟、—— 覚悟ならないこともない」

K (霜に打たれて蒼みを失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べてそびえているようであった)

私 (寒さが背中にかじりついたような心持ちがした)

K (その夜、襖を開けて)

「おい」

私 (目を覚ます)

K (黒い影が立っている)

「もう寝たのか」

私 **「何か用か」**

K (普段よりかえって落ち着いた声で)

「たいした用でもない。ただもう寝たのか、まだ起きているのかと思って、便所に行ったついでに聞いてみただけだ」

私 (翌朝、不思議に思って)

「昨日の夜、襖を開けて、私の名を呼んだか」

K 「確かに、襖を開けて、名前を呼んだ」

私 「なぜ、そんなことをしたのか」

K (それには答えず、調子の抜けた頃に)

「近ごろは、熟睡できるのか」

私 (通学路で念を押すように)

「あの事件について何か話すつもりではなかったのか」

K (強い調子で)

「そうではない。昨日上野公園で、その話はもうやめようと言ったではないか」